





詩  
季

醇庵書院  
第 全  
冊  
鈴木券太郎

# 改正月博筌

## 夏之部

### 四月部目錄

△印ハ非昔の  
季とおり

養生の法。夏雨の久。米の豊  
妙業其外人家重法の  
あるゆへ目録ハハハハ

### 四月

註 月支 謝子  
陰陽生 異名

△立夏節  
三丁 △小滿中  
四丁

### 日令

此部ハ四月日の定リ  
く女の定リルことを記す

△更衣  
△襦袢 △夏衣 △外花衣  
△ならま衣 △白重

△青簾  
△女衣服

△主水司 於供承  
△盆夏旬 △扇拜

△風炉の茶  
△貴船神事

△筑摩祭  
△山崎日使

△稻荷祭  
△大神祭

△八瀬祭  
△久世祭 △山科祭

△多賀祭 △畠田祭  
△平野祭



△當六祭 六丁	△當六祭 六丁	△當宗祭 六丁	△大津祭 六丁	△擬階養 七丁	△灌佛 七丁	△山崎天王祭 七丁	△戒壇堂開帳 七丁	△地主祭 八丁	△ゆり供養 八丁	△土塔会 八丁	△土田祭 九丁	△近江権祭 九丁	△菅宮祭 九丁
△夷本祭 六丁	△梅宮祭 六丁	△水屋能 六丁	△廣瀬祭 七丁	△竜田祭 七丁	△大峯上山 七丁	△敷山花摘 七丁	△神衣祭 八丁	△夏入 八丁	△千園子祭 八丁	△向日明神祭 九丁	△御蔭祭 九丁	△日向賀茂詣 九丁	

西中

岩神祭 四丁	△賀茂の國祭 四丁	△坂本山三祭 四丁	△賀茂祭 四丁	△葵桂 四丁	△さか祭 四丁	△中山祭 十丁
--------	-----------	-----------	---------	--------	---------	---------

東照宮御祭

△高野花供 十丁	△高野花供 十丁
----------	----------

月令

此部より四月一ヶ月日の定まらざるに依りて

△神祭 十丁	△神祭 十丁	△神取 十丁	△茶誥 十丁	△矢教 十丁	△三枝祭 十丁	△煮酒 十丁	△松前渡 十丁
--------	--------	--------	--------	--------	---------	--------	---------

特令

此部より四月の時候より

△首夏

卅

△清和天

卅

△外花朽

卅

△新暖

卅

△短夜

卅

○長日

卅

○時衣

卅

△卯の花衣

卅

草木

此部は四月一ヶ月の草木のふしをあらわす

△餘花

卅

△桐の花

卅

△檀の花

卅

△萩花

卅

△実柑花

卅

△柑子花

卅

△乳柑花

卅

△橙花

卅

△抽花

卅

△金柑花

卅

△雲洲檜花

卅

△佛手柑花

卅

△橘

卅

△厚朴花

卅

△秦椒花

卅

△梭桐花

卅

△柳花

卅

△榎花

卅

○槐花

卅

△外花

卅

△菽椿

卅

△牡丹

卅

△紅牡丹

卅

△芍薬

卅

△杜若

卅

△知母花

卅

△一八花

卅

△王孫花

卅

△覆盆子

卅

△白牡丹

卅

△芥子花

卅

△阿片

卅

△躍草

卅

△白丁花

卅

△風落州

卅

△梅蕙州

卅

△王不留行

卅

△羊蹄花

卅

△車前山花

卅

△文字草

卅

△吳光中花

卅

△山苜花

卅

△風車花

卅

△繡毬花

卅

△岩梨	廿四	△石藤	廿四
△宝鐸花	廿四	△鴨足中花	廿四
△夏枯艸	廿四	△茨花	廿四
△千日紅	廿四	△五月木花	廿四
△要花	廿五	△盧陀草	廿五
△新樹	廿五	△若葉	廿五
△木草茂	廿五	△木下留	廿五
△葉楊	廿六	△若楓	廿六
△栢若葉	廿六	△常盤木落葉	廿六
△新茶	廿六	△刀豆花	廿六
△葵中	廿六	△紫蘭花	廿七
△茶挽中	廿七	△玉卷葛	廿七
△玉卷芭蕉	廿七	△蓮浮葉	廿七
△根都古中	廿七	△猪殃々	廿七

△梅葉	廿七	△麥秋	廿八
△麥秋風	廿八	△青麥	廿八
△麥刈	廿八	△麥藁苗	廿九
△蓮のそゑ	廿九	△竹の子	廿九
△篠筍	卅	△椋実	卅
△綿蒔	卅	△美人艸	卅

生類

此部は四月一ヶ月の  
いそめのとありし

△郭公  
△子規△不如帰△ささぎ△田舎草△時鳥

△待郭公  
△初聞郭公

△郭公一声  
△夜郭公

△雨中郭公  
△名所郭公

△諫鼓鳥  
△布穀鳥  
△葭原雀

△老鶯  
△鶯付子

△雁島塀入  
△飛蟻

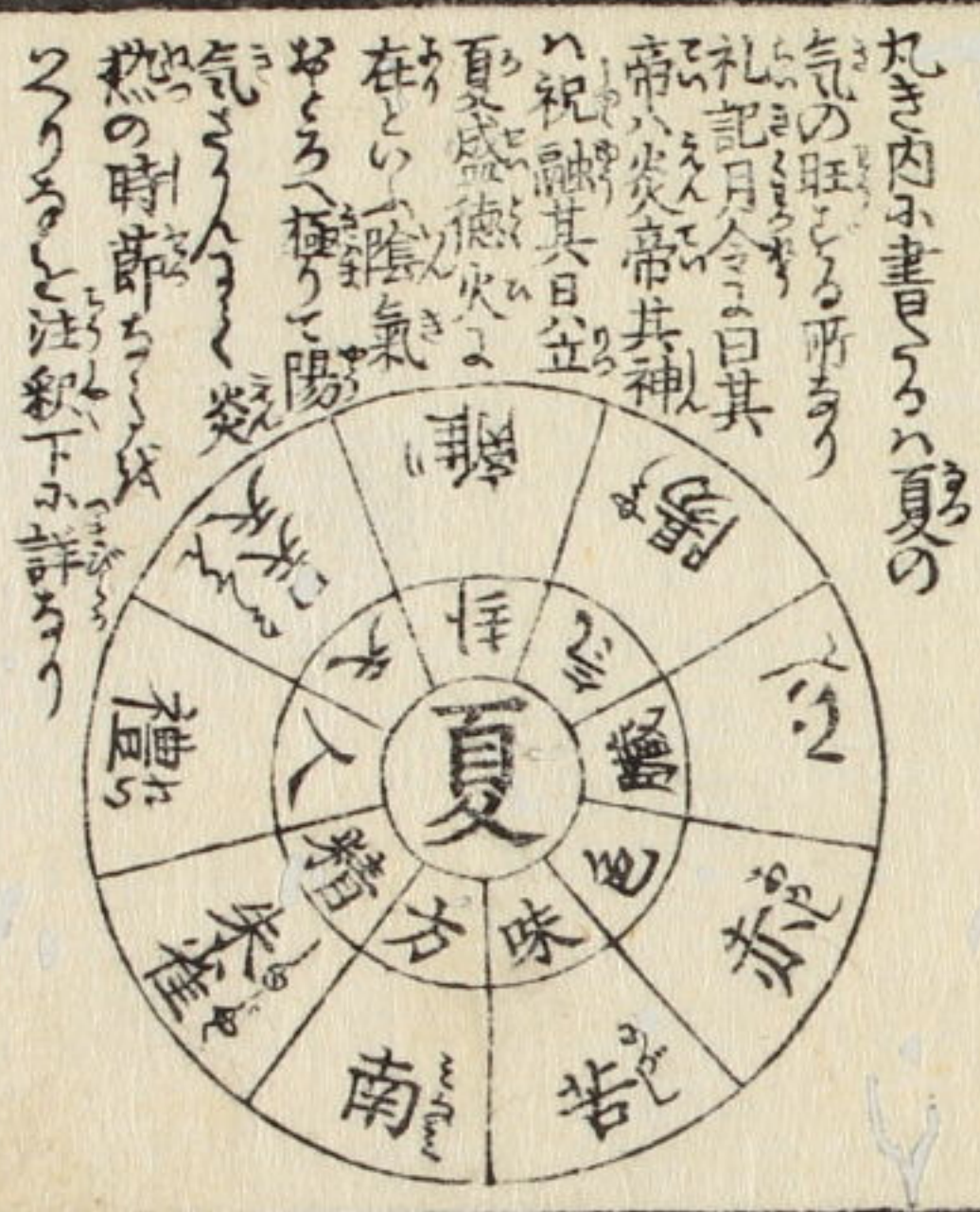
△蝙蝠	世辛	△蚯蚓出	世辛
△蜘蛛の子	世辛	△蚕眉	世辛
△枝蛙	世辛	△鹿袋角	世辛
△蟬の子	世辛	△初鯉	世辛
△生節	世辛	△鯉子	世辛

必用 此部より雨風の占破軍

の向方○日よりれりは○他行の心  
 得○作事の吉凶○料理執事合  
 物のよりめ等其外未あくあろ  
 む日の定まりくる事ハ口の日令の  
 部より此部より日のごまき  
 ざる四月一ヶ月の事とあつむ

四月 目錄

今博物文夏之部發端



漢書律歷志曰夏ハ則火  
其精天ハ在温暖の

氣百木を養ひ生どつり又日  
 假かり物假く大はて宜平とらふ  
 ○和語よまると訓じらあつぎとつ  
 音の下略やうをわと音通じらゆ

○方ハ南とらハ後漢書天文志曰日ハ南  
 陸を行と夏とらと見えり  
 ○夏ハ日月東南の赤道を行くと  
 南陸といハ易統通圖に出り

○精を朱雀といふ南方火をま

よむ其禽は朱雀といふ

○人の禮といふ周礼の注疏は白踐て身

行ふと履といふ履は礼といふ人の事

を得るなり礼法身備へ見事なり

てあやらざるなり○天を昊天といふ

は曰夏と昊天とを北安國の云元

氣黄と云ふなり陽氣さうん

して草木生くるなり○卦

離といふ人又取て和順なり

離と附と訓を別ましくとる卦

より又つく心を生下親と寄る心

とて○氣の陽といふ管子は曰其時

を夏と云其氣を陽といふ図の上

に詳なり○臟の心といふ人身の心乃

臟と陽を主として火に属し

夏は配當と故は火蔵といふ○色

は赤といふ其盛なりとて陽乃

色なりとて○味の苦といふ書

は炎上苦を候とて苦味

は屬する也といふ

夏異名

夏異名

○朱明 ○朱夏 ○炎夏

○炎節 ○光明 ○長贏

○昊天 ○南陸 ○炎帝 ○祝融

○仲呂 ○丙丁 ○執衡 ○南訛

○暑節 ○正陽 ○假宣 ○長養

○氣陽 ○炎霽 ○奇峯 ○南鳥

和 ○好氣 ○炎御 かせといふ 同上

名 ○名也 神中抄にもさの註は夏

百異名註 ○朱明といふ陽色なり

○炎節 炎夏 ○炎節 ○光明

つとも朱明といふは同ト ○長贏

といふ物とやいふ長とてなり

仲呂といふ陽散とて外なり 陰

實して中みあり 旅陽功とて

少ふ仲呂といふは丙丁といふ禮記

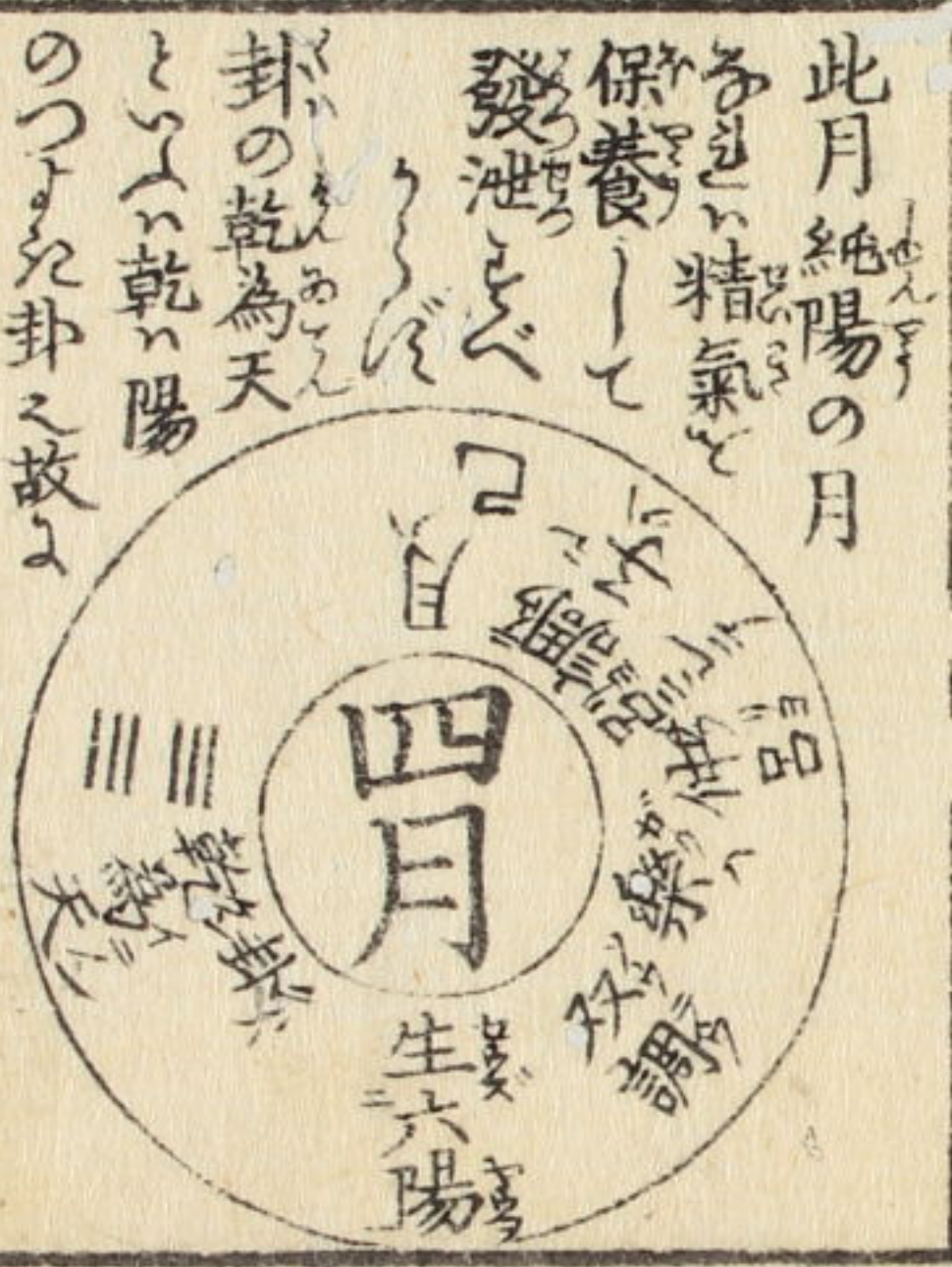
其日ハ丙丁ハ炳なり 萬物皆炳

然とて著見とて強大なり ○執

衡はかり南方の神炎帝えんてい離り來きり  
 衡はかりを執とり夏なつと司つかさどることなり  
 訛しといふこと訛しハは化くわること南方みなみ陽やう氣きに  
 いうこといふ物もの生なむこと一いつくことももつこと  
 ○正陽せいやうといふこと陽やう氣きたしこの時節せつと  
 一いつ事こと多おほくこと假かり宣のたまふこと假かり大おほくこと  
 いふおほなら物もの長なが大おほくこといふあらくこと○長  
 養やしやうといふこと物もの生なむこと長ながといふこと月つきまること云  
 ○元陽げんやうといふこと陽やう氣き此この月つきはは充み満みといふ  
 ちうりの炎えん霽じといふこと陽やう氣きふらたる  
 子こめるなりの奇き峯さかといふこと夏なつの山  
 に雲うみの出いることなりの又また夏なつの雲うみのけ  
 した山やまの形かたちはは似にていふことなりの南みなみ為なり  
 といふこと南方みなみの陽やう氣きといふこと物もののなること  
 一いつ事こと之これ○炎えん帝てい○祝しゆ融ゆう○昊こう天てんい  
 づももも註しゆ夏なつの由よし來きたの所ところなりの一いつくことももつこと  
 注しゆやならず夏なつの朝あさ秘ひ藏ざう抄しゆ  
 づももものなることなりの一いつくことももつこと  
 ○右みぎの外ほか三さん夏なつふらむこと物ものの別わかれ部ぶ有あり

### 四月之部

△此印あり能  
借の季と指す之



### 異名

△首夏△孟夏△初夏△新夏  
 △早夏△立夏△之月△余月

○槐夏かいげ・清和  
 △麥秋まぐち・六陽  
 ○純陽じゆんやう・正陽せいやう之月△仲呂△外月  
 △鶉う・鶉うの月△花殘月△夏なつ初月  
 ○さびくさびくといふこと月△ううのなること月

### 異名註

△首夏△孟夏△初夏  
 △早夏△立夏△之月△余月

○新夏しんげいいああくくといふこと夏なつといふこと○早  
 夏なついいくくといふこと夏なつといふこと○立夏りつげいい四月しがつの



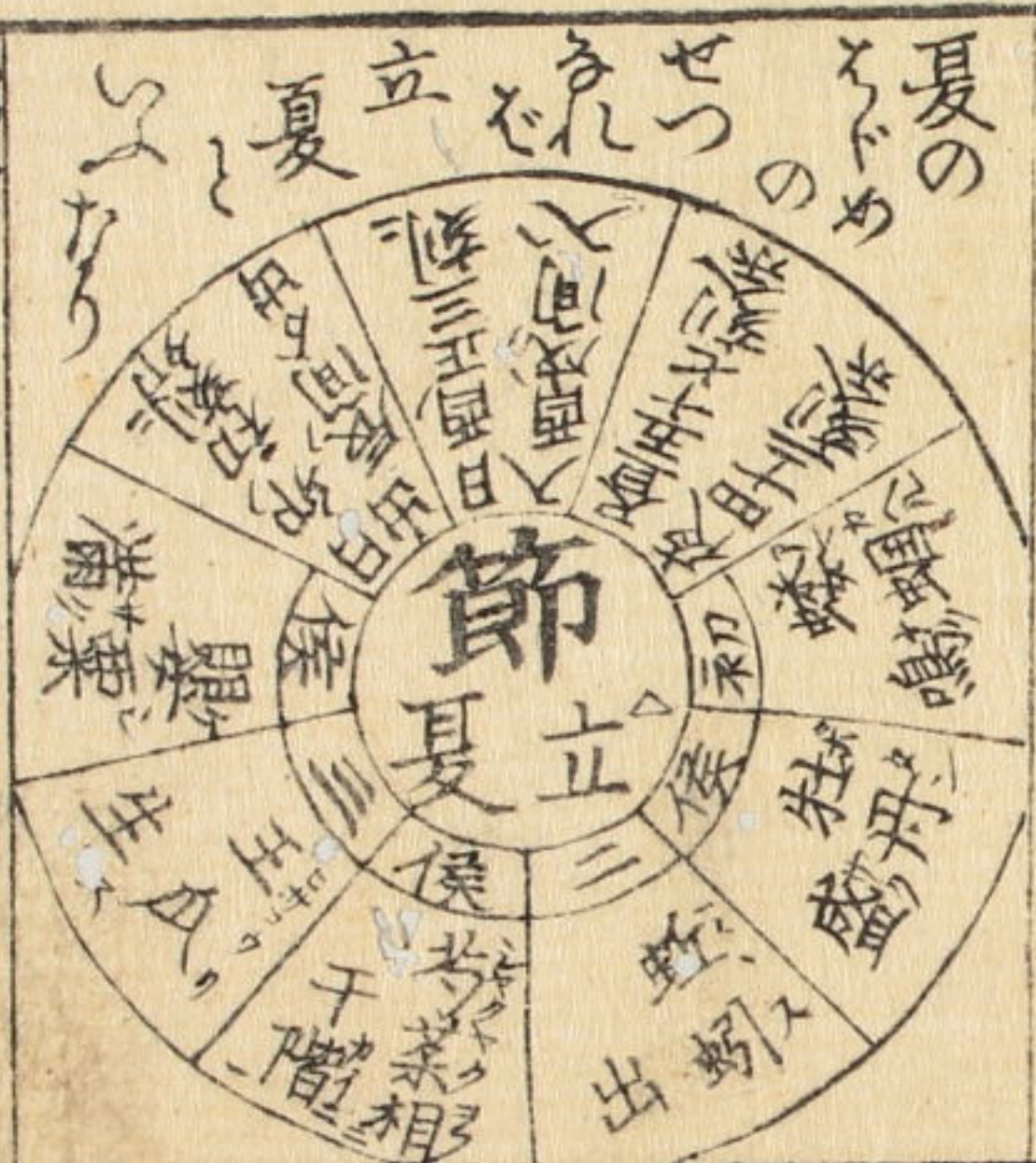
節の名としてつう。之月の月かきま  
 ころ意え。余月の陽あする月と  
 いふ。機夏いふは白花さく故  
 あづく。清和の陽をさやうく  
 麦秋いふは月火の六陽の夏至  
 と陽とて四月と六陽とする。純  
 陽の純の專の陽さかんると云。正  
 陽の月の正の陽の至極ある月と  
 意え。仲呂仲ハ中ハ呂ハ助  
 陽散と外ハあり陰中ハ在て成陽の  
 功と助と。如月々の花月と置と  
 蔵王 多まういの月

夏のたれまよひとまろわくとの  
 下やまもてんまとういの月

莫傳 うれた月  
 夏月のつらじられまみふ  
 うのた月と何とてとぬ

左 夏月  
 附をまていますとあひて月  
 夏月のふれわきのいふふ

節 〇七ノ二候。艸木七十二候。日出  
 入。昼夜長短委しく左ふあす



蟻蟻ハ蛙々此月地ニ六陽生  
 て陽氣上ニ升りて陰氣下ニ  
 降る。蛙ハ陰虫也。此月ハ  
 陽を迎へて地上ニ出る。燕乃  
 來る。牡丹。芍薬。嬰粟。此分  
 花さく頃也。此月の候とす

節 天氣占候 今日  
 の日 日輪

暈あまの洪水あり晴まの旱り  
 ○雨降まの五穀ふよる○今夜  
 月と九参星東ひあまの山田半  
 叔南ふあまの旱り北ふあまの大風  
 人病む○雲の大さ車或ひの笠  
 だく見ゆるものあまの時たま  
 陽水の氣さる暑あままで水の濁  
 とる○東風むを疫病の難る

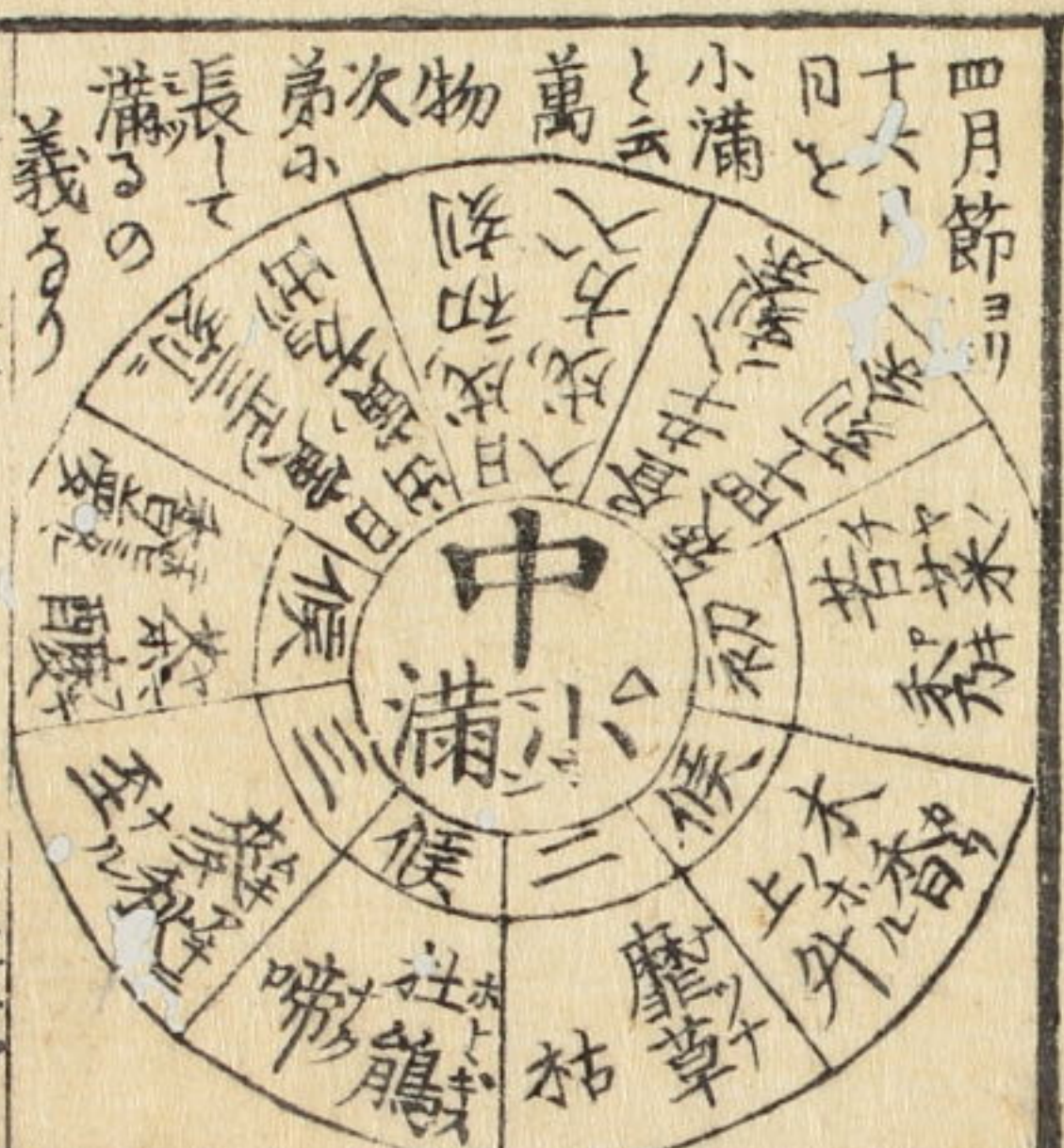
節朝



○風の定まらざる時あまのせ  
 定りて一方へ風とてふるる

中

○七十二候の艸木七十二候。昼夜  
 長短。日出入等倭く左記を



苦菜の茶の事之以頃茶と  
 つと取之○麻草なるもの類冬  
 水より生じ草の惣名之夏の  
 火氣のあまのてぬぞ○秋の稻  
 豆その外物の收る時るれは麥の  
 此月かり納るを秋とつとぞ

○木香上外○杜鵑啼○茶醸  
 香夢此皆小満の頃さる或啼く

天氣

小満の日と麥生日と暗  
 天なるは麥大いふ熟と

日令

四月日の定りたる事支  
 の定りたる事とあつす

朔 天氣 今日朝日の出る所  
東に雲多く西晴

たる月の中天氣は日小暈あ  
るべし今月中雨多し大風吹

けべ米價貴し西北の風吹  
け飢饉多しなり凡大風雨す

は秋大水あり小雨風すは  
秋の水多し晴き早し

○今日雨多し豊年二日小雨  
ふは水多し三日の雨ハ早し

更衣 △裕 △綿 △板 △郊の花衣  
△ちつ衣 △播衣 △赤衣

△白襲 又白重 △浴衣 △袴  
○更衣の時の服襲裏表共み

白綾或ハ平絹白くかき禁中  
の御装束今日より改む御帳の

かびらとてハ小き胡粉みて  
繪とてとてハあり着服を

かゆる故更衣とて今日より綿  
入とて入てありせぬとてハ

女衣服 衣裳の色は定は  
々々八月の中頃迄

下帯はいしの前をひとびき  
たるはえ昔ハ民家にて今日より

足袋とてとてハしとてハ禁中  
院方の女膺ハ四季より小めを

新古今 前大僧正慈圓  
ちりとてハ花の裏に本がらに

夫木 俊成  
衣を衣とてハふうのり

同 田中更衣 仲正  
衣のなをまづのあさねとてハ

詞 衣衣花深まうの社かたり  
いへる春のかみ蝶の羽とてハ

ぬきとてハ印のまきよ一夜の衣  
衣衣とてハ衣衣花衣衣

衣子のいへる山がのありはり  
衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣

衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣  
衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣

連山のちのそひらきや夏衣宗徳  
非いてそ我ら夜着る燦夜芭蕉

大酒をたて物ささげたる其角  
初給とくは扇ぬぐ大工部松竹

誰もくちやのそひらきの思初部立圃  
たけのしかりまふうつる衣十摩

去掃ふまのまじりさるもく西鶴  
二月て花、ふき捨る那 思貫

夜を合群、一、出来はかり之道  
狂ぬまそくふくくもくもくや

花さるやの種初乃そて人安  
夏衣のくくも捨とぬさるくハ

魚の腹、や卵おさるらん貞徳  
まはらばら 音葉簾とも云今日より

主日竹簾 殿は新に御簾子也  
續拾遺 土御門院

ひまをたていそ七知せんかたを  
くくさる、かゝるあふりたりとを

御酒とたひ扇と頒ら給ふゆへ  
△扇拜とも云今絶す △出づり

主水司始供水 四月朔日  
天子へ水と奉るなり延喜式に出す

孟夏旬 夏季の改る始小臣  
下の政を聞しめて

御酒とたひ扇と頒ら給ふゆへ  
△扇拜とも云今絶す △出づり

年中行事哥合 殿中將  
法人のけ、あつ神ふか、あふり

風爐の余 三月廿日始と云さだ  
朔日より風爐かゝる

京 貴船 近江 △筑摩祭△鍋祭  
とも云此里の女

嫁入を鍋をかづひて神事出再い  
と入るといふ二枚より幾度ととも男

りらる教程鍋とふさ参之 或、初  
非格とて福か、かゝる合高買

二京 調子村祭 山崎の近所へ  
日 圓明寺小倉大明神祭 能

三 天氣 今日天氣晴  
中風雨順めで五

穀豊年也  
米と商ふ輩四つ三と唱ふ

禁言 此日一切の血を  
見まこと公いむ 京 山崎日使  
山崎離

宮の社人行別を八幡(参) 俗に長者  
○宇治黄檗開山隱元禪師忌

近江 王榊御出 夜半頃大津四  
の宮へ御出是山王のまじり

祭の日袖 幸のさだ大津より  
大宮の拜殿にわへ入を奉る

上 京 稻荷祭 此月外三つ  
中の外れ日へ 弘法大師

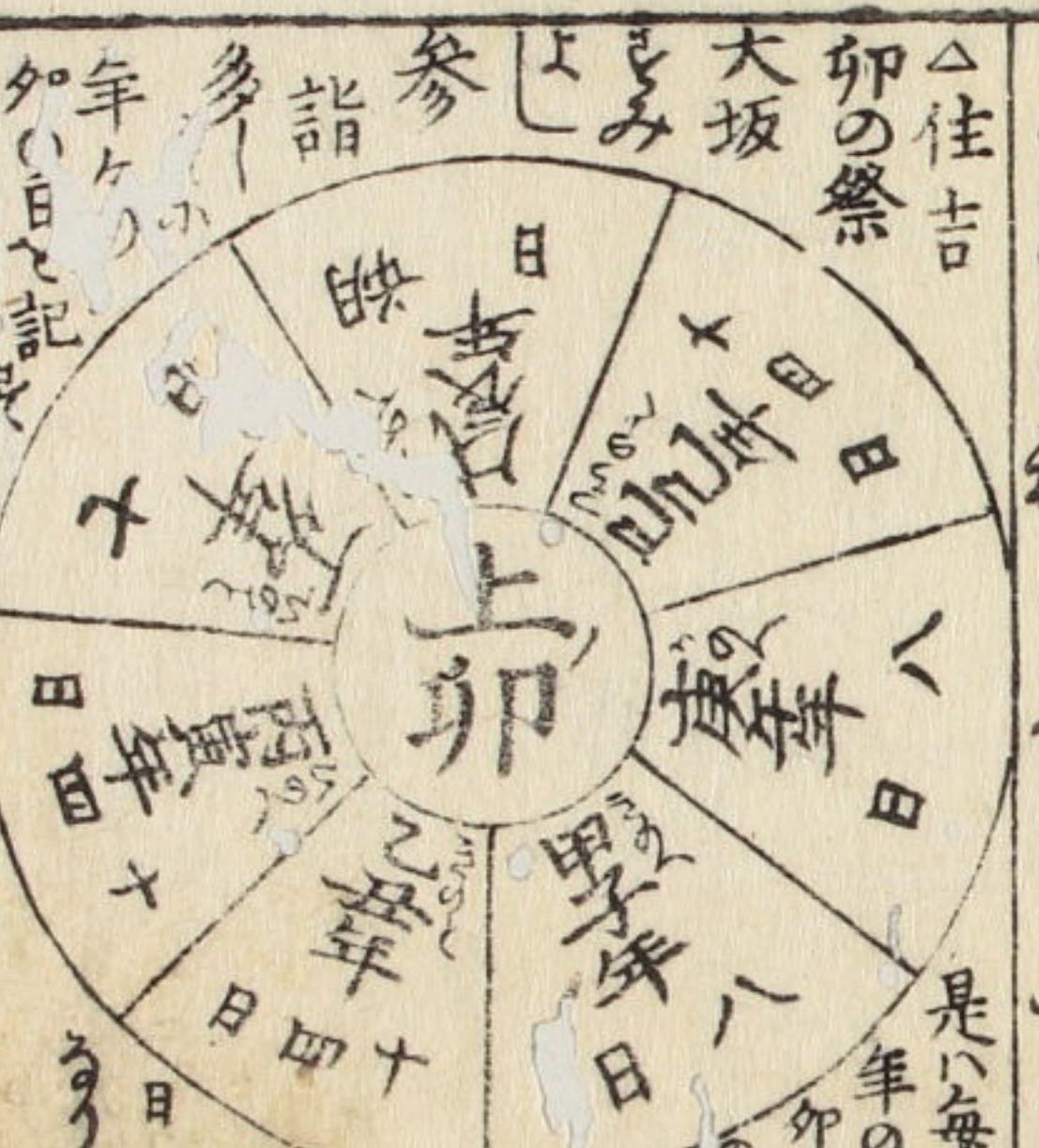
東寺造営の時 稻と荷い  
翁現しふ神へ初午の所(後)

是稲荷山の鎮座  
の時大師其面容を自らささみ

給ひて神事の最初祭とあり  
神費ふりける面としくり

大和 大神祭 大神といふ三輪の神あり  
祭の神の向てく 宗信法眼

我君の御代まさくんりりふん  
おほの御のまうりありせけ



上 京 八瀬祭 辰三ツあり  
中の辰日行りあり

上 京 山科祭 北山茂登岐明神  
祭△久世祭 三ツ己あり中

近江 多賀祭 △堅田祭  
三井寺 祭

上 京 明神祭  
北山イカタチ

上 申京

△平野祭 貞観年中  
年中行事哥合 二位中將

柿の葉のまゆり  
柿の葉のまゆり  
柿の葉のまゆり

大和

△當麻 祭  
△森本 祭  
△和 祭

上西 京

△松尾祭 貞観年中  
年中行事哥合 貞也

梅宮祭 橘氏の祖神あり  
年中行事哥合 秀長

河内

△當麻 祭  
△大津 祭

不成 天氣 今日雨降  
南都 天王寺講堂  
五穀貴し

四不成 天氣

△水屋能。四日五  
日あり 地人能く

大坂

天王寺講堂  
の結夏 音楽

大和

△廣瀨祭 △竜田祭 右兩社同日  
祭あり 大忌風神の祭と云

五京

神足 祭  
目黒祐天寺千  
部修行十五日と

七擬階奏

是は二月又列見とて六  
位以下の藝能あり者  
を撰て式部兵部の二部より  
ひきぞり、上頭升達を  
札に記し置き今日持てまゐる  
る大臣より取て奏聞せらるる

大坂

住吉小 祭  
今日法衣あま茶  
尊會 日とひひ出る

天氣

未の刻大風とまる昼雨ふれ  
豊年之夜の雨の宜い

禁忌

遠行旅立とるゝ悪  
○草木と切打とむ

灌佛

△佛生會 △浴佛 △佛の湯  
△龍花會 唐の寺にて五香水  
以て佛にゆすむ

△後山堂△五香水△つじ仏奉ル  
○五才六歩の沢池の像と造り金乃  
鉢の内へ全衆僧法と修す是世首  
生より人時天竜産湯と奉一象こ

○年中行司 嘆池 卯月のふくみ  
まのまの久しき法のまを  
○非麦飯と母たをて佛生を其角  
せつんの虫のやん法 左の寺でせつんの柱

○山崎天 祭○大原 大坂住  
證徳わもく堂参詣 吉

大嘗會○天王寺講堂佛生會 午刻  
音衆 ○同所太子堂結夏開關 午下

山城 比叡山花摘 ○戒壇堂  
開帳 ○水無瀬祭 ○かいで

光立寺 南都 奥福寺佛生會  
開帳 俗人は長し

大峯山 今日より始て上戸間  
とつ九月八日まで

役行者この山の岩窟に金剛胎  
藏の法と修と千有余年かある

九日 清水寺 不成 晴天  
△地主祭 日就日 天氣 世豊

四日 天氣 晴天 豊年 諺云  
今日黄昏時分と見よ

日月對してせし秋早き  
東南風の豊年なり

伊勢 △神衣祭 麻積連麻  
神明は奉るをいふなり

大和 △練供養中將姫の忌當麻寺  
△修行の真言浄土兼学の寺

十五日 夏入 佛家にて夏九旬と云  
て今日より七月十五日迄

禁足とて夏ふりつとつ夏  
へ地は草繁茂し虫多く出来  
ふと踏殺さふくは是を安居  
と云らるる夏十九丁出らる

京 山崎佛一山の衆徒と集め  
禪師拂子と取て高座に登り

偈を乞ふ諸禪師と問尋せしむ  
東山新熊野大般若轉讀修行人

江戸 小松川善導寺中將姫の筆  
阿弥陀の像用帳

大坂 天王寺生塔會十の刻行ふ  
昔の天王寺七村より鐘出

祭りあり其時の移りし馬具  
面人形を村を社内におも有とく

天氣 雨ふれい豊年暮時日  
月と見えふ相對しと照ら

せ秋野かり。月のゆるく早  
くして雲は紅色をまねい大い

でりきり又月のゆるくこれ  
そくしと白き雨とつとまど

六十 京 安珍寺鬼子母神祭 三井  
と同一く今日修行と

江戸 杉妻稲 近江 三井寺  
荷祭礼 千團子祭

願ある者わんごと千くらへ鬼子母  
神へまじりまると参詣しむりい  
くるまより千くらんとく

中子 京 △吉田 中辰 京 △向日明  
祭 神祭

中外 近江八幡祭 蒲生郡八幡村在  
後世に至り 移日杉山祭神石清水同

中午 京 下賀茂 大坂 玉造稲  
御蔭祭 荷御出

近江 △菅宮祭 中申 關白賀  
祭神三社へ

茂詣 御車之地下殿上人前驅  
あづま遊び駿河舞など

の神事ありと公事根元お出り

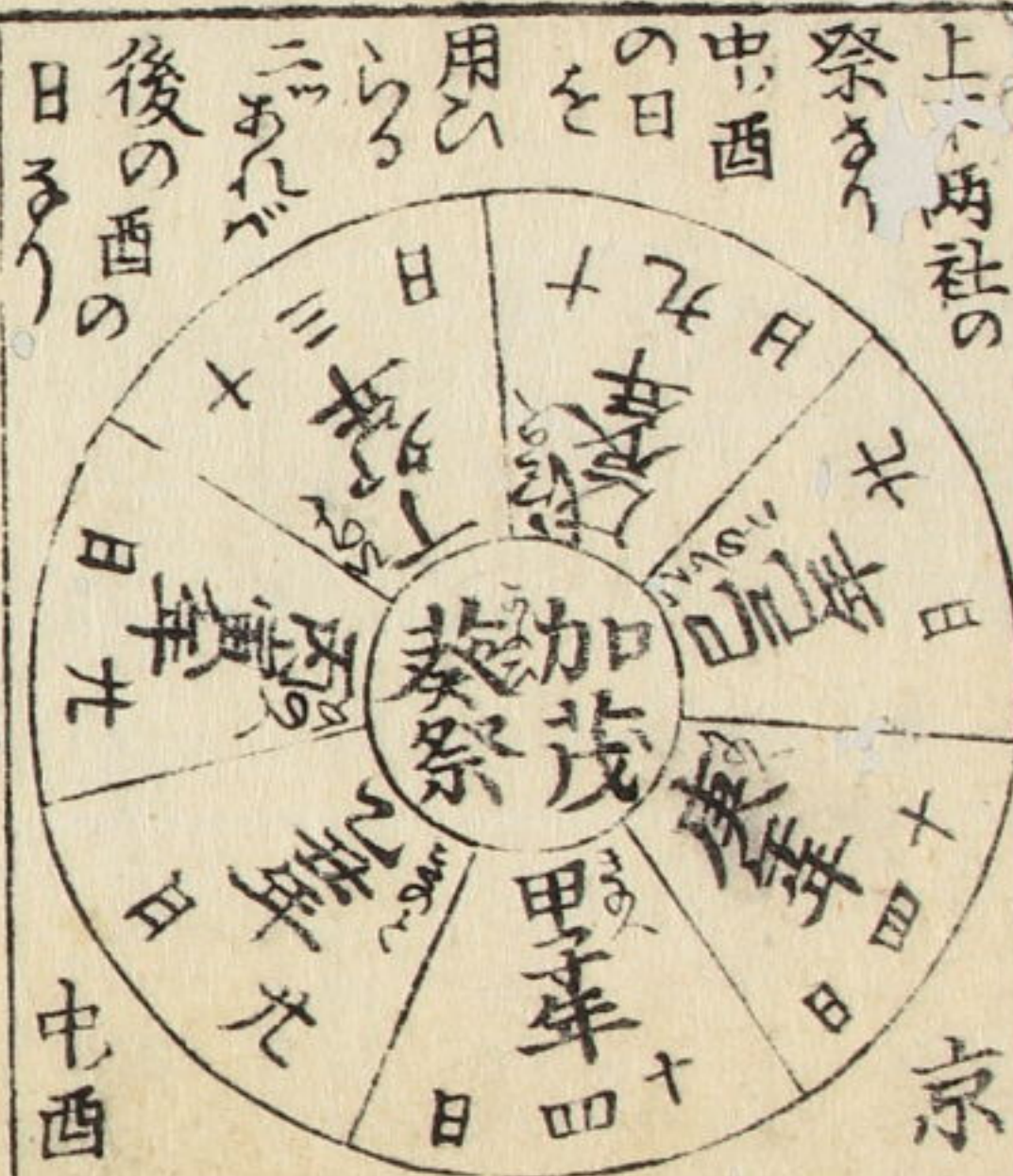
中申 加茂△國祭。加茂社山城國の地主  
故今此祭ハ國の者祭る今絶た

了明日の祭ハ内裏より祭らせ玉ふ之

近江 坂本山王祭 非さで流やむ  
くさぐさの賑まつ風鈴軒

中酉 加茂祭 上如茂みひらら乃  
御神の下加茂の神躰  
御社の神より△祭りとせり  
此祭りよめかたふなり





今日人を葵のつとむる  
ゆふは世俗葵祭といふ

御形日 御生とも各今日加茂の  
神生とも今日みんえ

葵祭 諸鬘とも云葵と桂と  
とき等故諸鬘といふ葵

菅笠擔 大なるそげ笠とさし  
荷ひまゝる行列あり

夫木 古きみちうたつる祭あり  
いとせうけつ加茂の川を後京極

年中行事哥合 頃阿  
神山のあふむをそてたがせり  
のころさうとさげさけん

夫木 西行  
ふん事法形の志あり  
かまりとよよれあじとそあふ

詞 神山崎し。同をさるる葵妻。  
みあま山 淡小たりの川のやうひま  
これ丹やりの矢とみくしてせれあひうら

ふまふる。葵うらる。葵車。勝  
車。物見。蓋 尾神るにさ  
連 びあててく世の葵の二系小宗牧

狂 かなあまくもかたけ神の祭  
みせも葵とさるるかうて常無菴

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 亥 中 京 是則愛

雲正尊一座と云云むうの平安城鷹峯東又社ありと光

二天皇御宇天應元年秋の慶俊今の靈地より一奉

あさり神輿の山下清凉寺より出つ土人の女屋臺にて

舞い或ハ傘鉾を出し風流の中山祭神輿の冷泉院に

おそろ石神これより天喜元年四月よりより先より

官幣と奉らると云是中日よりべー

七十和東大寺使

### 東照宮御祭

日光山 諸国ありの紀州若山御祭殊ふ美麗之和歌祭云々雜賀祭はよ

北 天氣 東南の風を真風とす

○南風の早西北風の洪水東北風の水西南風の平より

### 京

泉涌寺雲林院 如法経會廿九日

一 高野花供 紀州高野山を弘法大師の像の御衣をさる是と花供とあり今日高野

金堂より學侶の僧薬師會を修行し花を供するの日と大師の御衣をかゆる日と同日ありと云

北 伯耆 大山 天休節 〇祭 八日 不成就日

晦 夏駒牽 〇小の月あけの北八日小行する

天皇武徳殿より出御する庭上小御馬とひこ渡と白馬の節

會のあり此は来月騎射の馬射人をいひく御覽せ

向より負觀の頃よりはト先らる猶延喜式ふくじ

〇北野御神事 吉栢御供 新日吉祭 廿八日 近世の五月

月令

此部ハ八日の定ムル四月月一ヶ月の事ヲ多ク

神祭

此月神事多ク一名

齊刺

神祭也トモ松竹神

金葉

此の春お月のよふにこあて

神取

△神取は是る祭乃

三枝祭

辛川祭をいふや

三枝の花と酒樽小

さう故に神祇令小夏の祭の

所載らる(註)年中行事卷八道大綱

あつたてた三枝の花と酒樽

神乃いふまゝに酒樽をいふ

茶誥 宇治にて今月挽茶壺

ハ洗つるあり上品鷹の

爪といふ銘極上し兒を拾袋

み七壺へはめると極そ中そ

ある又其次茶の上と初むり中

中じ下と後むり銘と是は

袋あつたつる濃茶用之ふ

ちつたる次茶の薄茶は用之

今月諸方へ出るとも茶筆風

の時節より炉で重どるは

此茶の口切りとて方にて

月令

此部ハ八日の定ムル四月月一ヶ月の事ヲ多ク

神祭

此月神事多ク一名

齊刺

神祭也トモ松竹神

金葉

此の春お月のよふにこあて

神取

△神取は是る祭乃

三枝祭

辛川祭をいふや

三枝の花と酒樽小

さう故に神祇令小夏の祭の

所載らる(註)年中行事卷八道大綱

あつたてた三枝の花と酒樽

神乃いふまゝに酒樽をいふ

茶誥 宇治にて今月挽茶壺

ハ洗つるあり上品鷹の

爪といふ銘極上し兒を拾袋

み七壺へはめると極そ中そ

ある又其次茶の上と初むり中

中じ下と後むり銘と是は

袋あつたつる濃茶用之ふ

ちつたる次茶の薄茶は用之

今月諸方へ出るとも茶筆風

の時節より炉で重どるは

此茶の口切りとて方にて

月令

此部ハ八日の定ムル四月月一ヶ月の事ヲ多ク

神祭

此月神事多ク一名

齊刺

神祭也トモ松竹神

金葉

此の春お月のよふにこあて

神取

△神取は是る祭乃

三枝祭

辛川祭をいふや

三枝の花と酒樽小

さう故に神祇令小夏の祭の

所載らる(註)年中行事卷八道大綱

あつたてた三枝の花と酒樽

神乃いふまゝに酒樽をいふ

茶誥 宇治にて今月挽茶壺

ハ洗つるあり上品鷹の

爪といふ銘極上し兒を拾袋

み七壺へはめると極そ中そ

ある又其次茶の上と初むり中

中じ下と後むり銘と是は

袋あつたつる濃茶用之ふ

ちつたる次茶の薄茶は用之

今月諸方へ出るとも茶筆風

の時節より炉で重どるは

此茶の口切りとて方にて

**煮酒** 京師是と酒煮くは  
て酒肆をさしとす

おやひいませれ 餓しむ是を  
酒煮の祝いとひさる

**矢數** △大矢數も云 洛東  
二十三間堂と此事

とらん弓の天下ととらん矢  
を通とことむより四月

中旬ふ極まれり 日のあつれ  
とりつてのゆへなるべし

**松前渡** 商人蝦夷松前ふ渡  
る冬春の寒氣強く

渡りかす故 此頃渡り秋上る  
非表はて秋の日はやん 嶽等水

**時令** 此部より四月の時  
候より事とあらむ

**首夏** 四月の異名あるも  
その只夏の初と云意に

新古今 素性法師  
をへんともあふ春もあつり

いとねえとるまごらもろあ

建保百首 定家

大井川のりぬおせれそのま  
なるさかたりと衣をひさる

新續古 首夏風 左大臣  
吹風もたやいとらん花の香の  
うされたたけりけりまうら

詞らつた。友のそ。氷はあし。清  
みさる。あまはつる。こむろ乃。味。

きのめはさたりけりた。まはは  
差はあつた。卯月の始め。株とほ。

春の情。さほ月。夏の来る  
非半とみるも卯月のあつる思貫

ひくくともあまのひるあけ移竹  
狂ま二月つものまはる異竹の

寂寂とさふまはさひたり 六谷

詩 首夏五字對句

清和未換衣 風光夏葉初

セイワニエダカハコモラフハカヨウノハシメ  
ノトカニエダカハカヨウノハシメ

幽僻還聞鳥ハナハオケルニシロクノク花落春鶯晚ハナハオケルニシロクノク

詩 首夏七字對句 詩礎

西灣水綠堪銷日セウワンニツミツミドリニタタリタタラシ列樹雲レツツツクモ

南浦花紅好送春ナンポハナクキハニハニタラシム艸綠春クサミドリハニハニタラシム

詩 首夏之詞 明 郭享貞

巡簷燕子掠晴絲メノケキエニシカスメセイ隔水茶烟ワタリタタラシム

出院遲イシヤキ燕ノ片々ト飛ブハ晴天ハルハナガリタタラシム

人到午風吹暖夢回時ヒトニハニハニタラシム青草クサ

盛リニハエレダリ人ノ来ラサル処ホド繁ル午夢サメル折フニ風

和清天ワヘン△梅天。△冬も四月ノソヨメナリトツ

天の詩。孟夏清和天メノケキエニシカスメセイ云周之氣クモノキ

源氏胡蝶タテマ又清タテマ

夫木 小大進

雲とれて月とみほる夏の花クモトレテツキトミホル夏の花

卯花朽ウノハナク頃日の雨とつり頃日の雨とつり

卯花朽ウノハナクの花とつりの花とつり

きり哥ウタ三月ふも五月三月ふも五月

△山里の夕の花を守△山里の夕の花を守

新暖シンダン四月の頃四月の頃

短夜ミダヨ日と春日と春

長夜と秋と短日と冬と長夜と秋と短日と冬と

長日チカヒ唐の文宗帝の作唐の文宗帝の作

夏日長と殊夏日長と殊

時衣トキイ若草色若草色

卯花衣ウノハナイ

四月 草木

瞿麥衣ツクシ あはれ

草木 爰ふ四月一ヶ月乃  
とと木とあり心

餘花 のころこみ △青葉花 残花○春ふ  
おきて咲のる花く

新拾遺 内大臣  
別つのはあぐとやゆく春の  
日較は花のさたゆるらん

家集 山餘花 雅有  
ちりれるま成さる山くげ乃  
まをいづつひとまのむし本

続古今 残花 俊頼  
桜ふ花跡くぐいひくく  
花とてしぞまのあき

詞 枝ふすふさ。深さ本ぐま。  
あ奈はまらふ。まはれ見。風の跡す。  
あ跡ふまははるひらさる。か入る山

桐花 くわい △白桐。黄桐。紫桐。荷  
桐。是皆桐の種類く

梧桐 くわい 桐ふ似て皮青く疎皮さ  
日月の関を知るべし都

十二葉あり下よりかきて十二葉  
の中の小葉もまに其月関也鳳凰  
乃栖此桐さる

寂蓮法師

百葉や相の指ふとむむの  
ふとせの木の色もかりし

俳 移りて咲てえやる梧桐あき  
庭造り並ひてゆし相の花 其角

檀花 まゆ △松。伸。思仙。木綿  
顯輔

若のむす若うたもえもここし  
是と嵐はあうせももろか

枳花 ささ 時珍曰葉の橙のむく木  
白花とひらく

詩 枳殼之詞 雍陶

澧水橋西小路斜 ホツイヨコ道

日高猶未到 君家 ハタケニミタカ

村園門シノ花ハナ相似イレヨノ同

處々トコロトコロ春風ハルカゼ枳殼キコクノ花ハナ九カ廿セアタカイ

蜜ミツ棋シ花ハナ大和本草オホニホン其花ソノハナとナ  
タチナトト多ク云

棋シ子コ花ハナ花ハナ子コとも云トモニ夫木ウツキ  
け程ケのノ葉ハ多タク入イ着キ

依ヨてテ優ユりリ嬌セウきキ花ハナ棋シ子コ引ヒ慈ジ田デン

乳ウ棋シ花ハナ久年母クニシノハナ花ハナ正マサ  
橙ダイダイ似ニうウ橙ダイダイ花ハナ正マサ

柚ユズ花ハナ樹葉ツバ皆みな似ニ似ニ金キン  
うウ花ハナ甚シ香カウババ金キン

棋シ花ハナ雲クモ州シウ橘キッ花ハナ花ハナ  
花ハナ白シロ花ハナ雲クモ州シウ橘キッ花ハナ花ハナ

佛ブツ手テ棋シ花ハナ実熟ミツクと人ヒトの手テ  
似ニ似ニ故コ名ナづづく

橘キッ包ツバ橘キッ盧ロ橘キッ軒ケン生シ  
草クサ昔シヨク州シウ庭テイ古コ州シウ

どよトヨ花ハナ橘キッハハ棋シ類レイのノ惣ソウ名ナ也ヤ  
だダいイくクとトうウのノ類レイとトてテらラびビな

かり世カはハたタらラびビとト称ショウする物モノの  
包ツバ橘キッ多タりリ万マン葉エフ三サン方ホウ沙シャ弥ミ

橘キッのノかカやヤむムむムむムのノやヤむムむムむムのノ  
のノをヲそソのノむムむムむムむムむムのノむムむムむムむムのノ

新シン古コ今イマ通ツウ真シン  
移ヒ来キ孤コ雅ヤ也ヤとトてテ夕セキ風フウりリ

同ドウ家ケ隆リウ朝テウ臣シン  
今イマ子シよりヨリ花ハナ咲サキそソひヒるルまマをヲ

家ケ集シュウ風フウ諍シヨウ盧ロ橘キッ香カウ清セイ輔ボ  
君キミ代ダイはハたタもモるルとトてテ吹フ風フウのノ

夫ウツキ木キ閑カン居イ橘キッ光クワ俊シュン  
たタちチるルいイはハいイのノやヤれレとトいイふフ人ヒト

同ドウ夜ヤ盧ロ橘キッ如ニ願ガン法ホウ師シ  
あアらラたタらラぬヌとトいイふフ人ヒトのノまマをヲとトてテ

同ドウ里リ盧ロ橘キッ隆リウ祐ユウ  
あアらラたタらラぬヌとトいイふフ人ヒトのノまマをヲとトてテ

あアらラたタらラぬヌとトいイふフ人ヒトのノまマをヲとトてテ

あアらラたタらラぬヌとトいイふフ人ヒトのノまマをヲとトてテ





椋栢の皮一年に三度あるいは  
四度剥べし剥されば木は死す

長せざる皮と剥く葉はあつ  
所より剥初る葉の付る所

中いれれば常か **栢花** 正字  
とふ時ありし

○栢は七つ妙あり一多壽二多  
陰三鳥の巢を四虫く

ど五霜葉玩比六実る七落  
葉多しはて文字を各べし右を

栢の七**覆花** (非) 五葉一多のた  
絶く云 **覆花** 中ぬ果は外曲彎

○夫木川邊の客の棧に坐を  
らむ人の宿るぬいさし 為家

**槐花** 今月花咲 **卯花** 拾の  
実秋く

異 白荊花 錦帯花 空疏 楊櫃  
花 志保草 雪見草 初見中

夏雪中 垣見中 卯の花とつへ  
つとるの中畧る箱根うつ

き 十姉妹の花いろく △岩本う  
つと △里う川さ △三葉うつき

○言 新古今 白河院  
卯の花乃ゆりくさける垣板をば  
きるれば月の影とぞ見る

卯の花は咲ゆる所は白く人乃  
波りせゆる垣のとぞ見る

夫木 後京極攝西  
里人のうのをまからふ山うの  
かと雪とのひりさそとる

家集 水辺卯花 西行  
五回川うけまうれを見らるる  
おせぬのさきにまう卯乃を

家集 卯花似夕顔 匡房  
字は見えぬはくひはほと夕顔の  
垣のよまろくはけさうれを

夫木 卯花似月 為家  
久うの力むけをそとあうけ  
かろのそとけける卯の花

嘉祿百首 何卯花 為家

久々のあつきの河乃卯れをき  
月うけぬく文々連のそく

五社百首 暮見卯花 俊成

志どろひのうらさく不の遊風舟  
浪よせまさらりし卯の花

夫木 湊卯花 定家

かふるまのゆのへいさく不吹風舟  
かきこそそむる者卯の花

夫木 舟路卯花 家隆

うねふ乃ほやまうれのゆくと  
夜をむとらふゆをてん

明月 山卯花 敬定

神りぬよさうたむけとまう後と  
うのゆさけるゆの山うゆ

夫木 社卯花 定家

ふぬさるこまのそくやと人屋  
ゆりてまほくかふるのそく

鳥羽殿哥合 田家卯花 俊成

いさ田のいりろくふゆけてたり  
あけまの卯の花れさうそ

夫木 卯花繞家 寂蓮

卯れむのかさひのりまふあがれは  
せむらうりぬめくうさうり

金兼 卯花連垣 匡房

うまをらふておまし山雲の  
垣根はくまほ笑るうれそふ

千載 遠村卯花 政平

うれそふのそそめくうとさうの  
かきこそそむる卯の花

後拾 山家卯花 通宗

後絶てふるふもされさうとん  
我のそふやと笑る卯の花

詞 名目 月 山 山雲のほひ 露

ふらうり 月 山 山雲のほひ 露  
の月 山雲のほひ 露

川 名目 月 山 山雲のほひ 露

の志うらさく不のゆと河乃卯れをき  
雨卯の花をき

花のほふかふる卯の花をき

木陰木のるりきき

表の下りの垣あがり垣の山づりの垣。卯の花垣。ういさ垣

①連ちら言さしけ花のさうり小宗砌  
卯の花小ほくさる垣や小宗春

②卯の花やうまの山づりか後宿其角  
卯の花の流も廣つたういさ井蛙

③卯の花を一度はゆり卯本小貞徳  
狂卯の花は何あうある白雲と

④不審のそと  
なつらん貞徳

牡丹 異木芍薬 魏花 鞞 紅 姚  
紅姚 黄国色 天紅 魏

紫馬紅 裴白 鼠姑 紀羅老紫  
葉庭紫 牛家黄 狀元紅 二十日

草 深見草 名取草 富貴草  
鎧草 花王 ことさる草

草庵 頌阿  
嘆あううたれそい文のゆりそま  
さくせも人の花ふるるむらみ

玉葉 愛牡丹 師兼

細るあかそしるんもさうり草  
梅くういあらむの色う卯

①花のとり火の白くひも  
くう。病。たぶさ。そ病。さくく

②哥よ春之連俳は夏なり  
非 花とそとやむさうや七日家宗内

③牡丹とらふふあ牡丹の其角  
牡丹とらひあつるもあひる移竹

④家もあけくあやうんあ専吟  
狂 花の揚解いりやういさうい

⑤花の揚解いりやういさうい  
こらういあそこの花は月うつく柳因

詩 牡丹五字對句

味嘗貧外見 異香開玉合

不似地中生 怪粉泥銀盤

詩 全七字對句 詩礎

曉豔遠分金掌露 正開時  
ハナサカリ

暮香深若玉堂行 淺復深

群芬盡怯千般態 有此花

幾醉能銷一番紅 醉數杯

詩 牡丹之詞 唐 李太白

名花傾國兩相歡 常得君王

帶笑看 美人上兩子 君王

御氣二入ル故常ニ君王笑

解 秋春風無限恨 沉香亭北倚

關干 此兩品ニムカハドノヤウナ

怨恨モ忽チニウツルハニ

詩 飲酒看牡丹 劉禹錫

今日花前飲 甘心醉數杯

酒宴ヲナスナリ 但愁花有

語不為老人開 花モノ云ハ

為ニハ口ハヒラクニジキトナリ

牡丹 錢思公方說ニ白

花ヲ第一トシ紫

花ハ其次ナリト云ヘリ今櫻ヲ

木ノ王トシ牡丹ヲ草ノ王トス

沉香真 唐ノ明皇ノ牡丹

ヲ栽ラシ御殿也

白牡丹 花潔白ニシテ愛

狂 依味ニ待マハレシ花ガレド

ヤク牡丹ハ白ニ極マル 負柳

詩 白牡丹之詞

長安豪富惜春殘 爭賞

新開紫牡丹 都ニモ春ノ名殘

ノ開クヲワレトチカ 別有玉盤

子テ賞翫スルゾ 美露冷無人起 就月中看

丹ヲ白銀ノ盤ニ 見立テ作レリ

白牡丹

種類 三四。五重七重  
花びらあつくはやく

○あし菊。五重大目ん○白縮。六  
七重大目ん○出雲。六七重中目ん  
○香久山。三重大目ん○袖の雪。大  
目ん二重とこしうふこあり

紅牡丹

種類 漆井。大目ん濃  
紅りあざかき多し

○筑前。中目ん色濃七八重いろ  
蠟紙よべとゆるさるじ○志保  
凡大目ん薄紅より紙まらぬお  
とけなるじ○朝日山大目ん  
五六重丸咲○見越。濃中目ん八重  
○妙覚寺。大目ん四五重○廣沢。大  
目ん四五重○握々。大目ん九重○  
待夜。中目ん九重より○山里。とれ  
紫菊さた○大紅。大目ん黒紅より  
ちりしとれ九寸より一尺まで○乱紅。  
中目ん五六重紅色より○演紅。  
大目ん多し○小泉。色中紅さると

花さるまてこたると  
きつとありあり

芍薬

異名 將離。花相。鞞  
食。餘客。和名ハ多分

草。かよ州。秋根とて薬  
用とるあり

非芍薬の四子や葉の清空 立圃  
芍薬は骨折と治す也 秘傳

狂咲や牡丹と百合のちくは  
ねすまのね芍薬の花常樂菴

詩 芍薬五字對句

幸因親切地 孤賞白日暮

還遇艷陽時 暄風動搖頻

詩 芍薬之詞 唐 韓愈

浩態狂香昔未逢 紅燈燦々

綠盤龍 昔ヨリカハル色香ノ風  
流ヲ見ズ花ハ燈ノキラ、

カナル如ク葉ハ音竜ノ口タカニニ

似々 来獨對花情驚恐知

在德宮第幾重 ハ十八仙家ニテ

毛幾重ス

芍藥名花 関守。血三重紅の中ハ黄うこん交リ

○小夜雨。血三重隨分白○金孔雀。血二重や紅○白砂金。白三四

重○たつき。薄紅二重花中うん白○錦木。血紅三重りや少黄砂金

杜若 燕子花合や花がたつて

杜若ハ香草あり此花の正字馬蘭本名ハ芍薬実あり

○建久百首 定家

拾玉 杜若写水 慈鎮

山家百首 水辺杜若 仲正

唯々 山下あのかさしりて ひくさひは乃さ小咲く

○哥の部立ふれつとて春小 とあり連俳より夏より 詞詔。

山下あ。核衣。う夜。そく。名所。侵者。八栢。志賀。昆陽。

廣深。池。あ。腫。沢。花。う。く。連。あ。ぞ。あ。より。信。一。杜。若。春。

○非。養。ま。け。あ。小。花。る。杜。若。其。角。あ。の。目。や。門。控。て。初。か。あ。り。信。徳。

○狂。あ。て。さ。く。ふ。の。あ。や。め。つ。つ。と。似。さ。り。や。似。さ。り。と。い。は。れ。ふ。く。雄。長。老。

○一。そ。い。こ。う。ぞ。か。さ。し。り。林。鳩。

信海法印

杜若名花 ○鷲尾。さうこん中

○濡鷺。さうま。だ。○薄雲。目。



前草花

〔異名〕牛遺。牛舌。車輪菜。花穂。

文字摺

○紙摺草ともかく本名(た)つまびら(ま)き

靈光草花

○種瓜。花黄。畧。绿豆に似る。実同。

山草花

白花。風車花。白花。紫と帯ふ。

繡毬花

白花集咲。岩梨。二升。

石藤

○五月つら。つら。花葉も紫藤に似る。紫白の二種あり。

夏枯草

葉(ま)つら(ま)つら。花紫。

室鐸花

花鈴。欽のま。倒。垂る。青白色あり。

鴨足草

〔異名〕鏡百草。虎耳草。花淡紅色。

茨花

△薔薇。△牛棘。△山棘。△牛鞭。△実と營実と。

名つく野生の紅白二種あり。人家小裁りの花の形色数品あり。

〔晋〕六帖。秋(い)け(き)う(い)そ(ろ)う(ろ)の(花)の(色)は(あ)ら(わ)る(る)の(と)い(ふ)に(あ)ら(わ)る(る)。

千日紅

花の盛り久く。七百。日紅は勝る故に名づく。

青木花

花紫。黯色。めて美。る。に葉常盤。

要花

○扇骨木。正字未詳。ら。寸小白花とゆ。く。其。

樹最も堅硬して扇骨とさす。堪(た)へ(ら)る(る)故(ゆ)に(こ)の(名)あり。

盧陀草

○菩提三礼草。近。世南蛮より来る。艸。

新樹

樹の植物の總名。新葉の薄翠と云。

〔新古今〕

曾根好忠。花(は)の(ま)け(も)同(じ)な(り)合(は)て(て)天(あ)照(あ)る(る)月(つき)の(影)を(ま)れ(る)を(定)家(さだ)家(け)。

夫木

定家





新茶 新製 古茶 新茶 對之云

刀豆花 色淡紅 非 慈花 豆の心 羅州

葵 二葉草 葵のく 日長草 折る 桂と西の日加茂へ

遺と加茂ふて葵はく 日長草 日蔭の

く 葵の日蔭は咲て日あを 唐

土めて菟葵といふ 山州

茂の山中 小生と二葉の葵あり

面青く 裏紫色と帯少く 上より 桂の木 枝母つけ

て 簾及器 北山中 村

より 葵の種類 五月の 小侍徒

新古今 小侍徒

あつ 月林山 露 暁

非 物怪 葵の 種 慶安

狂 ぬく 葵の上 貞徳

息水の 貞徳

詩 葵五字 對句

野酌 勸芳酒 満園 種葵 藿

園蔬 烹露葵 遠屋 樹桑 楡

詩 七字 對句 詩 礎

山中 習靜 觀朝 槿 奈蜀 葵

松下 清齋 折露 葵 祇 綠 多

紫蘭花 紫又白あり

詩 紫蘭五字 對句 拂簾 蕙風 涼



阿人もさびしくもはげしくも  
ぬぐはれかかるとまうまうか 教二

青麥 青むすね 鬼光

麥刈 立春より百二十日と刈  
と自ら但小麦十日と刈

麥藁笛 麥の莖より吹く笛  
と小児の戯る

○西行澳州山下附一人の童子小逢  
お僧ハ何国へ行玉と問ふ西行歌  
枕を舞をさるる行ふと然る  
うはあの方ふと多必辱を得玉  
兄冬生夏枯る草を哥むる僧も  
とあふとふ西行此の事頓丹弁  
か夫より引いて洛へ帰るとこ  
この所も西行のゆくり松と  
まのの樹今ふあふこの草は麦  
と是塩竈の明神示現とふ

詩 麥秋五字對句

川光淨麥隴 綠樹連村暗

日色明桑枝 黃花入麥明

似水流 麥ノ色トリワケ秀テウ

波ニ似タリ 風作跳波時隱見

雨添新漲乍 沉浮風雨ノ波ヲナ

龍濤生四月 秋麥秋豊饒

怪狂瀾頻起 陸漫教文偉賦

中愁起 カカニナニノ  
起カゴトシ

蓮花 若根順の和名扱  
小蓮の蕾和名いぬ

哥多どに詠るるよららと灰灰母

とを待てる賤き身と塵灰をど

人の思つる心より蓮泥を生じぬ  
泥と戀まるともへてよきなり奥後抄  
和名扱等々泥とつづる字と  
こゝらと訓をわかん

竹タケ 笋タケノコ 竹萌タケノコ 初筍タケノコ  
匡衡

親のくまむし人いぬまると  
竹の子けしあたるいふことし

能ノ 笋の皆能師るれや東坡の画季吟  
竹の子の春の候より育けり久住

狂キヤウ 笋の首とかむ後う那 其角  
狂キヤウ 笋を 新發をともむして

詩 筍之詞 唐李商隱  
嫩籜香苞初出林於陵論

價重如金 價ハナハタ貴シ  
皇都陸海應無數 忍剪凌

雲一寸心 都ニモ草山ニナカレヘシ  
剪ヲシキモノナリ

採筍法 朝早く見て露の上ら  
さるものそぬこととくべし露上る

のい大竹ときる 竹根ひらりと  
止る法 隣よりさるる来り

とさるる 海帯と多く埋め  
と此方へ生さるることし

淡竹筍 四月 味ハ淡  
盛出 紫竹筍 竹ハ同

美人岬 唐項王之婦人虞氏自死其墓上  
生じり此有るなりと美人岬と云ふ

右の外説多し一委して八世六下出  
能くさくさうのあやま入竹 可申

篠筍 篠ハ小竹ありて俗に  
密く呼ぶものなり

類多し筍と皆篠子といふ

哥 拾遺 道昭  
今ハ我々もき老の坂こへて  
みよけりわらうとくの下らり

櫻實

生い青く熟して赤黒  
妙薬よく魚の毒とく

非実様

やぶやぶと通る人々の  
是水

綿時

三月 樹木の  
葉の

種植

大豆 黑豆 大豆  
小豆 胡蘆 葫蘆  
後栽

石菖蒲

秋牡丹 枇杷 秋海棠  
桂 楓 杜若 秋菊

挿木

沉香 蓮翹 雁木  
芙蓉 木犀 柏 椿 等

採採

蜂蜜 稀莨 紅花 蚕豆  
桃仁 桑の実 麥

生類

此部より四月一ヶ月の  
生るものあり

郭公

子規 杜鵑 杜宇 蜀魂  
望帝 不如歸 百舌鳥

玉迎鳥

田歌鳥 早苗鳥 妻戀鳥  
田長 志の田長 無常鳥 夕景

鳥 蜂背鳥 勸農鳥 くらり 時鳥

貞應百首 遠郭公 為家

常盤井百首 朝郭公 仲正

社頭郭公 大宮大政大臣

弘長百首 雲間子規 行家

法印印宗

俊成

同 野郭公 定家

同 野郭公 定家

同 野郭公 定家

同 野郭公 定家

同 野郭公 定家

文殊の木の下に宿ふはるはる  
あまてやうつらまをこころいそ

同 里子規 入道二品のこと

さうく宿も志のふり里は志を  
あまほくま守あくそとらふ

家集 山寺郭公 西行

時あまていそとまりねと  
こころのふりたうりまたり

詞 初音初声。さうくうう唱百料返

初声。志をさく あまほくま守あくそとらふ 志のひ孫。

ひと声。妻のひ。ううふ。志のう。春

初音。ううす。ううて。あまの古

声。あまのひ。ううう。ぎ。み

心とさ。初音 あまほくま守あくそとらふ

ううう。里 あまほくま守あくそとらふ 里を

ううう。里をううの初音。うう

あまのう。海邊。あまの松。うう。

夜のう。海邊のう。あまのう。

に。あまのう。夜うう。うう。初

音。あまのう。うう。うう。曉有

明の月ふ。あまをううす。あく

あまれやあく。朝天のうのう

あく。あまのうのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

あまのう。あまのう。あまのう

むくくとあぶる声。人少くは里をば  
くれどと向ふ。うら人も晴。上は晴。

月（おとぎの月）もあつた。雨（あま）のちのちの

なれ。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

かく。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

一僕先へいひつやうきを 陸舟  
和調

待郭公 大抵待僮と云ふ 為家

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。

あつた。五月のあつた。まよひ。あつた。あつた。



郭公声

是覚つるを心へ  
△白川殿 軌忠

時をくぐり一歩のふらりしつみ

まきのつらふ遠ざかりしきり

①連 一歩の足踏山跡 やとくおふり

②非 一歩や只是武の山若候 伊當

狂 ちりまいぞ辱るまゝ抱きやとぢす

やとくしつゝ今の一歩 井浦

夜郭公

月よとせしつみり  
△続千載 高遠

まよふまゝいづゞさやわはは郭公

ユも夜ふくくもなとつらり

①連 誰がぬの印は夜月夜保とぞす

②月 中々文ゆる夜子のやとぎす

③非 煙味香どかた小鏡 夜半子規

詩 夜郭公詞 顧况

野人自愛山中宿 况是葛洪丹

青西 オクヤニラレハコソハツ子ラキイ  
夕ニレテカツコウレヨクノエ

庭前有箇長松樹 夜半子規

采上啼

コノタカイニツガニハニアルユ  
ヘニ夜ナカコノホトキス

ノコエラキクトナリ

雨中郭公

多く五月雨とと  
ウリ或ハ淋キ体

ともしよあへり

◎家集 雨中時鳥 顯季

五月あふいまこのつらやとぎす

あつたにぬまでふるふるなり

①狂 ぬの夜やを丹のそこれ郭公

りして絲もふあうあり 東陸

名所郭公

多くあり 詞の所は出  
△夫木 中務卿

あ言ぬふひりのあはれや ます

まのまよふ人ぬれをやあくらん

①排 けのほれ玉の知まど郭公思貴

②狂 口如粉とさつて啼くやとぎす

かみの沈み髪をうかつて 英中

○唐土の郭公のあつくま至つて

あはれこいこいこいこい待て聞こ

と欲す詩小作ると其趣なり

詩 郭公五字對句

杜宇呼名語 渚濱行客薦

巴江學字流 山木杜鵑愁

詩 同七字對句

詩 礎

花外子規燕子月 山岫連

水邊精衛浙江潮 杜鵑啼

望御臺下秦人去 顧雲霄

學射山中杜鵑哀 子規啼

詩 子規啼

韋應物

高林滴露夏夜清 南山子規

啼一聲 夏茂之露ヒヤカナル晴

隣家婦抱子泣我獨

展轉何為情 時ニ感シ物ニ應ジ

霜婦ノ小兒ヲ抱キナガラ泣

郭公

蜀ノ聖帝其臣下

ヲ讓リ亡ヒ去ル時ニ此トリ

啼故ニ蜀人ホトギスノ啼

ヲ聞テ望帝ヲ悲ム其鳴

ヲ不如婦ト云カコトシ

諫鼓鳥 布穀郭公の雌

葭原雀 葭原

老鶯 亂鶯

故老の名あり亂鶯も同



あれはつら霜の玉をいれらる  
詞さか。蜂の井。蜂のうら。さか。蜂。  
物のあはれ。さか。さか。さか。さか。さか。  
夜にうら。蜂。さか。さか。さか。さか。  
さか。さか。さか。さか。さか。さか。  
あさ。さか。さか。さか。さか。さか。  
筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。  
と。風。色。ふ。さ。さ。さ。

① 狂風はく吹く。狂風はく吹く。狂風はく吹く。  
蜘蛛天下足巴蜀就中多  
世カイニ多キクモノ中ニモ  
多キハレヨクノクニナリ

蜘蛛之詞 元稹

蜘蛛天下足巴蜀就中多  
世カイニ多キクモノ中ニモ  
多キハレヨクノクニナリ

綺虚空織横羅 スコレンスキアイカ  
紫纏傷竹栢啮噬及畏蛾  
木々ケラメケリ。木々ケラメケリ。木々ケラメケリ。  
一モラ。一モラ。一モラ。一モラ。一モラ。一モラ。

珠櫛無奈何  
① 蚕眉 眉と作る時とてと云もの  
後蛾と卵と産是と翌年の種を  
① 枝蛙 木の枝に居て鳥く故  
① 鹿茸 春落て四月ふ生る角  
のさく袋角と斗も季と持る

① 蜂子 椀。椀。椀。椀。椀。椀。椀。椀。椀。椀。  
① 不鯉 鯉一名。松魚。肥満魚。  
① 鯉釣 鯉。月。月。月。月。月。月。月。月。月。月。

① 鯉釣 鯉。月。月。月。月。月。月。月。月。月。月。  
或ハ鯉牙こそ物なり

① 鯉釣 鯉。月。月。月。月。月。月。月。月。月。月。  
或ハ鯉牙こそ物なり

① 鯉釣 鯉。月。月。月。月。月。月。月。月。月。月。  
或ハ鯉牙こそ物なり

生節

鯉魚と四ツふきたう、蒸し燻乾して脯とす。とらふ

其いまこ堅硬まろくさるものよ  
世俗よんでままうとつら

必用

此部は四月要用の事  
又ハ天氣養生の法等と記

日刻

己の日に己の刻事とるは  
不用やぐさ月建く

出行作事

西の方小向して  
今月天道西小行故

破

夜九ツ 夜八ツ 夜七ツ  
未の方 申の方 酉の方

軍

朝六ツ 朝五ツ 辰四ツ  
戌の方 亥の方 子の方

方

辰六ツ 辰五ツ 辰四ツ  
辰の方 巳の方 午の方

樂事

清和の天と云霞も  
飄るるは空の氣

色翠まろい○更衣かたふん地  
よ○木々の葉若やうらうの葉

山吹も咲のうらうの牡丹芍薬  
盛り富貴之○郭公の初声。葵祭

天氣

曇りても北風強く晴  
西南の風の雨も梅雨の前

西風続吹とまると云昼夜よく此  
風にて北國廻船来と○今月晴有

木麦多○庚辰辛卯雨降の蝗  
後○丙寅丁卯雨降米僧貴

田子庚申の日雷多れ木小虫  
○今月雨多るれ麦よわし夜雨

養生

立夏の後甲  
五日北斗辰己

多かれは淋  
麦と撤す

建と此日乾く来疾風暴雨  
雷を人々と傷と急く虚邪賊風

くろく聖人これと矢石の如く避  
くやうとや委い内経を見ず

四月用意之品  
ふん

海蘿子干  
今月く  
よりり

七月十日申にて干はくしつり  
季の夏とともふあめ

**徴不出法** 天氣よれた時  
日はさうして

くねまふ箱よひき紙日  
てとらまふ張もおさて梅  
雨のうちこれとひけい妙き  
づる率さうれあひ妙き  
衣服をもかくれおとく  
とれがび生とるこは

**草木と伐法** この月諸  
木とまは

蛙とむしとま  
の葉あきとて標してまの  
ころきうさふだる五月よ  
いりて能葉しつるあひ

**糊ふ虫はくさる法** 櫛乃  
葉と

おあひみちておひの日数  
と経ても虫少しも生せむ

四月飲食并料理献立

**料理**  
**汁** すすき 塩鳥  
もどく ちりめん  
**清**

**汁** さぎ たいの  
ごろり うと  
**鱈** あぢ  
あぢ しょうごのこ  
しそ

たけのこ たいのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ

あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ

**味** うるふ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ

**煮物** さぎ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ

**吸物** さぎ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ

**和會** さぎ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ

**物** さぎ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ  
あぢ しょうごのこ

清汁 丸いそ ますび 竹の子

進汁 林いそ ますび 竹の子

膳 ちが根 ますび 竹の子

差味 ますび 竹の子

煮物 ますび 竹の子

和會物 ますび 竹の子

時魚 鯉 生節 あら 魚

鹽身賊 鳥 鷺 青 五位

青物 苺の臺 青うんし

海松 毛づく さいと ますび

白うり ますび 竹の子

酒味替る法 夏の酒の味

貯竹筍法 盛過る

貯ん 思 随分 大筒

十五枚 入 味い 火い

安し 酒壹升の中へ 極乃葉

かえ 貯竹筍法 終る時分

貯ん 思 随分 大筒

貯ん 思 随分 大筒

貯ん 思 随分 大筒

貯ん 思 随分 大筒

水際を敷く度目よき水氣  
の入りぬやうめて置べし五月  
下旬此筭の終りされを六月

少く損等 同法 皮を去り  
あはき処を

切捨ニッは割て篩の間よ塩  
を一をいふは桶より上よ

いく重もかき蓋して 又法  
あしをかききくべし

皮を去り熱湯にてゆひき  
いで締めをくべしを月時

白水よあつて用  
色白くしてよ

茹久し貯法 季びと桶  
か入蓋して

河の瀬早さ処よ埋め石とお  
きいひきく蓋しゆまそ

も生もそよく持つ







季寄  
解  
改正古今博物笈  
卷二